

翻刻 『うぐひす笛』 (春上)

早稲田大学近世貴重本研究會

伊藤善隆  
野村亞住  
二又淳  
宮脇真彦

〈解題〉

はじめに

本稿では、平成二十二年度に新収となった『うぐひす笛』「春上」(随流編、寛文十三年二月二十五日自序)を翻刻する。

本書は、もともと五冊本として刊行されたものの第一冊のみの端本である。しかし、従来『うぐひす笛』の伝本として伝存が確認されていたものは、秋部の一冊のみであった(天理図書館蔵)。また、編者の随流は『誹諧破邪顕止』(延宝七年刊)他を著して高政たち談林派との論争を展開するなど、俳諧史にお

いて重要な役割を演じた貞門俳人の一人である。すなわち、端本とはいえ、新たに本書が出現したことは、貴重な発見であると言うことができよう。ここに翻刻を試みる所以である。

書誌

書型：横本(十三・五糎×二十・〇糎)。

冊数：欠一冊。

装丁：袋綴。

表紙：濃缥色無紋表紙(替表紙か)。

題簽：なし。

匡郭：無辺無界

字高：序文、十二・二種（二行目「新玉のゝあさぶさ」を計測）。

発句十二・〇種（五才冒頭句を計測）。

柱刻：「一（く三）」「春録目」・「春上一（く卅九）」。四丁目、

丁付欠。

行数：序は每半葉十一行、本文は每半葉十二行。

丁数：序四丁、目録一丁、本文三十九丁、合計四十四丁。

### 编者・内容

本書は、随流（寛永六年（一六二九）〜宝永五年（一七〇八）、八十歳）の編になる発句集である。阿誰軒の『誹諧書籍目録』

に「鶯笛 五冊 寛文十三年丑二月廿五日 随流作」とあるが、

この日付は、今回出現した序文の年記と一致することが確認できる。また、もともと五冊本であったとすれば、今回出現した第一巻が「春上」巻であったことから、全体の構成は「春上」・「春下」・「夏」・「秋」・「冬」の五冊であったと推測することができるだろう。

随流は、西武門の俳人で、中島氏、名を勝直、通称を源左衛門、別号を松月庵、一源子といい、京都三条川原町上ルに住ん

翻刻『うぐひす笛』（春上）

だ（『誹家大系図』）。その俳歴は、西武編『沙金袋』（明暦三年（一六五七）刊）に「勝直」として二十七句入集したことに始まり、寛文元年には『水車軌・水車集』を刊行している。廻文の発句を得意とし、『水車集』には独吟廻文千句を収める。また、『随流』号は、加友編『伊勢踊』（寛文八年刊）に「中島氏随流」として発句二句を載せることが初見である。

寛文十三年にこの『うぐひす笛』を刊行して以降の俳歴では、談林派との俳諧論争で活躍したことが著名である。すなわち、『誹諧破邪顕正』（延宝七年刊）、『誹諧猿轡』（延宝八年刊）を刊行し、元禄期になっても『貞徳永代記』（元禄五年刊）を著して『誹諧 京羽二重』を論難するなど、その活動は長期に涉った。

この「春上」巻には、巻頭の「対州住」以下、二六七名、全八三二句を収録する。随流自身が西武門の俳人であるため、本書にも西武門の俳人たちが多く入集する。また、義克・義道・義武・正世などの『水車軌・水車集』入集者が収録されていることや、才麿が宇多則武として入集することも注目されよう。

なお、従来現存が確認されていた「秋部」（天理図書館蔵）は、目録一丁、本文五十五丁で、二六四名（他に作者不明が一名）、

八三〇句を収録する。

おわりに

以上、本書のあらましを簡単に述べた。未発見の残り三冊も、いつの日か発見されることが俟たれるものである。

#### 参考文献

雲英末雄「中島随流略年譜」(『近世文学資料類従 古俳諧編

32』勉誠社 昭和五十二年一月)

今榮藏『貞門談林俳人大観』(中央大学出版部 平成元年二月)

阿部倬也「随流」(『俳文学大辞典』角川書店 平成七年十月)

(いとう よしたか

湘北短期大学准教授)

(のむら あずみ

教育学研究科博士課程在学)

(ふたまた じゅん

明治大学非常勤講師)

(みやわき まさひこ

教育・総合科学学術院教授)

#### 〈凡例〉

翻刻にあたり、原則として異体字・旧字等は通行の字体に、「ハ」・「ミ」は「は」・「み」と改めた。また、底本に濁点はほとんど付されていないため、私に濁点を施した。その際、底本の濁点は(ママ)と傍書して区別した。

宇久丸かき序

新むらさき一まうくわさむき  
 うらあふくまのうぐいすわり  
 ゆみおきまうりこわりの不  
 里 equal 女をちやうくまき序  
 ろりてあまきひまのゆりて一まひ  
 四うぐいすひののされゆは  
 八月花あふりちやうくわさむ  
 るふまきむげとーのたれあ  
 藩刀けう一并馬り難うけ  
 あうまうひるまうひをさる

序文の巻頭丁

うぐいす笛

春上

元日

菊園と菊物乃花物あり  
 わすれぬ今此りりす雲  
 紙製書と葉りり赤心竹  
 元日や一まき鳥巻の神風  
 ねんきとけり物と内念  
 眞菜う元息と長編草  
 伏保姫や千早う良言  
 大蛇や後赤心冠茶碗  
 梅ふ徳う砂やいさ

出典長 西武  
松江氏 維舟  
今井氏 金壽  
朱辨院 三頭  
宇和嶋住持辨氏  
山下氏流瀧字 宗臣  
山正氏 佳種  
出典 陸院

本文一丁目オ

〔翻刻〕

うぐひす笛序

新玉のとし立かへるあさぶさより、またる、ものはうぐひす、はりつゞみ、おきやがりこぼし、のぼり、助四郎などこそ、京童部のもてあそびものにして、一きは心のうきたつものなれ。卯月八日、花ひとつ所望してはの、さまに手むけ、はしの下の菖蒲刀をさし、竹馬に鞭うつて、あら手づかひのまねびをなせる「二」オも、いと愛らし。や、秋風立て、とんぼとまれ、やんまかへせと、夕暮に至りては、あぶなき池のはたにのぞみ、鈴むし・松むし・目じろ・山がらをとらんとては、あさまだきより、たよりなき野山の茨畔をさがす。かゝることについても庭の花すゝきを、おのわろがまなこには、殿さまごとのやりと見、まがきのこがね菊を、姫ごぜのしほの目には、「二」ウ 雛のさかづきよともてあそぶ。なを冬ふかくなりて、ふれく粉雪、空に虫わく比、おかん氷のうへをかけはしりて、せきぞろ・うばらの来るをよろこ

ぶ。是皆、いはけなきたはぶれのあだ言なりけらし。しかるに、当世此もてあそびもの、ひろくはやりて、国々所々に拾ひあつめし浜の貝がらのつくることなく、はやしの松ふぐりのかずくことに「三」オ たらば、心の水なぶりせしみぞ川は、言葉のちりにうづもれ、わが門のまへのたなはしの古く成ゆくことをなげきおもひて、ふたり・みたり友だちかたらひて、たがひにかげを見つ、きひつせし作意のわろさ、ことをつげ口小口にゑらむといへども、ちゑみじかく、まなこきびはなれば、ふるきたぐひをくりつくすことあたはず。されば、このかみ「三」ウ 水車のくさびをゑりこみしよりこのかた、年は十とせ余り二つ三つになんなりぬる。かゝるに、今すべらきの御代万々歳におさまりて、はいかいの味ひのあまひことくは秋田の外にながれ、趣向の思案は博多のねり酒よりもまくおほえて、都鄙のはふこゝゑざる子に至るまで、古のまはれるをよろこび、ほほう発句を吹出せるならし。「三」オ たとへ時代うつり、こと古くさくなりゆくとも、此もて遊びのうつは有をや。ぶり

ぐの緒の糸たらず、門松の葉のえだをつらねて、おかざりのかづらながくつながり、このうぐひすぶえのこゑ久しくとゞまれるは、かぶりの仕やうをもらひ、色づきたちのよすがともなりぬべきことわざならぬ。此むさくさの中に、おとなしき人のか「三」ウくれまじりて、ことかしましくとも、布袋のあめねぶりたるかほして、見のがし、あひそだて、ともによだれをながし給ひねとぞ。

于時寛文拾三みづとうし

中春後の五日に、中島氏

随流みづから序之。

(白紙)

鶯笛題目録

春上

鶯	梅	鶯	初寅
霞	具足餅	初雪	左貴長
御忌	初午	残雪	
春氷	薪能	春日	
春月	涅槃	石塔	
天菜花	椿	春雨	
百千鳥	鶯	燕	「(春録目)ウ
春鷹	木芽	柳付	
瘤柳 付	柳魚	婦雁	
三月三日 付	曲水宴	桃	
蓬餅	鷄合	潮干	
御灯	雲雀	春駒	「(春録目)ウ

うぐひす笛

春上

元日

蔵開き万物の籠る心あり

あすはあす命のうちの千々の春

試る筆や篠なり千代の竹

元日や一の鳥居の神の春

羽だ、きも三つの初そ酉の年

蓑莢が元日をしる福寿草

佐保姫や千早かけ帯しめ粧

大ぶくや後喜の時をこす茶碗

橘の櫂が原やにし遥

歳旦の言葉つゞきやかざり縄

天秤やかねかけ松の門かざり

八百よろづ売買帳や神の春

松立る都は千世の仙家哉

守利あれや祈らずとても鏡餅

福徳の宿札うちや若ゑびす

蓬莱の山のしらげや残る雪

門松や葉色もおなじ若ゑびす

子は丑にゆづり初の今年哉

書初や天地のうちのうつし物

さほ姫は内親王かかざり竹

手ぐらまぐら宝蔵立今年哉

申はけふたあち巳午のえ方哉

粧り縄にひかれてくるや戌の年

元日は新市なれやえ方だな

いしぶみかみちのく紙に筆初め

とそ酒をうるや提壺テイコがけさの声

大ぶくは先立春のかぎ茶かな

来る年の矢がらみなれや粧縄

楽カク只カクするすみもする試筆哉

恒川氏正光

荒木氏一佐

水野氏藤次

津崎氏友実

畑山氏一義

坂氏直明

小野寺氏道列

吉村氏義武

西村氏久重

大恩寺虚哉

宇和島桑折氏頼邑

山本氏一吟子

宇和島住加幡氏正弥

山口氏宗友

永原氏秋月

三原住辻氏不求

白川住聡山

雑掌ザツシャウやふくさに祝ふ庭かまど

世の式もかはらぬかげや粧竹

ほうらいや都の富士をはたち花

大ぶくをのみ染付の茶椀かな

松竹のけちめおかしき粧り哉

試筆をやかくて都の内祝ひ

年徳やはるくきぬる粧り繩

わき物や宝若水雑煮もち

のどけさや一際立てけふの春

玉あれば角やぶりくうしの年

狛犬や鳥ゐの中の神の春

かち栗や蓬萊山のさゝれ石

書初やすみよし神よしえ方よし

おとらじと祝ふや一二三ヶ日

福徳の宿とまるとや年おとこ

春立や大音京衆のうたひ初

小野寺義道

大西氏善但

山本氏重郷

竹井氏吉久

〔春上 二二オ〕

杉山氏尚栄

京大原氏千之

藤田氏川草

池田氏安直

辻氏信真

同

市村氏定治

太都

高橋氏重次

竹井氏常久

大西氏善直

大原氏千春

〔春上 二二ウ〕

諷初やけふ思ひたつうらの波

正月や大どもだいぐ三つの春

きそ初め仕合のよき小袖かな

佐保姫や尻がるに立けさの春

大筒も御代あつきひのためし哉

三分一のこんの雪のはじめかな

千尋あるかげや尺とるかざり繩

雪はなんぼきへずはありとも花の春

歌賃とて大きに和ぐ雑煮哉

若餅やきねのさきまで花の春

たてば立春と霞やおもてうら

門口も齒がためするや松と竹

〔春上 三三オ〕

正月や蓬萊山も余所ならず

かしこしや御代一疋のうしの年

かざりにや心ときめく花の春

おもしろの花の都や筆初め

土の戸をひらくや矢倉弓初め

和州宇多住岡崎氏谷庵

東六条池田氏三云

乗秀

江州八幡住伴氏只計

同井上氏宗重

同勝見氏重武

同伴氏資春

同岡地氏一友

同堀氏好行

同寺村氏春家

同伴氏一可

同伴氏資信

江州八幡住丹羽氏長好

同寺村氏清貞

同勝見氏一重

同桐山氏歩入

同石井氏花夕

御代やすぐにもとより末の粧竹

同近藤氏吉賢

門並は松にことゝふ礼者かな

同諏訪氏長佐

四方広く鬼門や明てうしの年

同等覚院一輪

たゞしかる徳をあらわせ弓初め

同福原氏光存

一輪や日輪ひらくはなの春

同川口

蟻がたや蜜のはじめの神の春

同梅原氏重常

正月や待身は年も若気かな

同苗村氏善次

「(春上三)ウ

年明て十徳ありや老のはる

同梅原氏休和

まき砂や白きを見れば今朝の春

同忠良

江戸と京や相生のやうに門の松

同澁川氏随有

日の本も子より開くやかどの松

同瑞泉寺智浅

田舎までけふ餅花の都かな

同事足軒未及

ひらけるや破顔微笑の花の春

同祐正院一身

若水や春のはじめの御岩井

同今西氏宗斎

さほ姫の目ごやしなれや鏡餅

同斎藤政善

六十一のとしに

もとの卦にかへれば今朝や筆初め

同八幡多賀住一隆

親の世をつぐみ祝ふや酉の年

同江州八幡長次

改年の吉左右に立や門の松

同神原氏伊安

かずの子に腹の布袋やおちん坊

「(春上四)オ

ゑび鎖やかぎりしられぬ蔵開き

同鶴川氏勝政

大ぶくはちやきりしきりの湯玉哉

同池田氏正之

うら白やかざり出たつかどの松

同村上氏長次

ひとつねて正月うれし小殿原

同鶴川氏友明

よろこびてうぶやにぎはふことし哉

同小川氏女さ

めでたさの数書初や千々の春

同速水氏女染

若水や春もくるくつるべ縄

同山本氏一吟子

書初や相違あらざる自筆の状

同道列

伊勢海老や色紅みの花の春

同大津松本住宗永

陽春の徳利やそなふとその酒

同谷庵

立てきたうれしや花を御代の春

同和州五所住氏光

三輪山や檜原杉はら神の春

「(春上四)ウ

歳旦もはらみ匂するや年籠り

同所良弘

泉州豊中辻村氏芳房

同泉州豊中辻村氏芳房

年徳や宿をみそなはしめかざり

丹羽氏貞則

旧年のけふのけ角やうしの年

江州馬淵門願寺長願

三物は太福帳の三字かな

齋藤氏政善

鶯の声やきのえに辰の年

同忠田氏家久

冥加あれや言の葉守の神の春

一子

大黒の家づとなれやふくさワラ藁

市村氏定治

太郎月や正月へ、と夕がすみ

大坂安井氏好春

年のおやさほ姫ごぜのうしろひば

讃州観音寺住一砂

花の波うち返してや若ゑびす

同安順

さる程にまはりきにけりけふの春

同久吉

せいは道によるや源氏の弓初め

同意春

〔春上 五〕ウ<sup>①</sup>

書初や命毛ながき筆のうみ

同宗次

諷初やむかしを今に口うつし

同林昌

君が代やおさむる手には福寿草

同今川是政

礼を以て身をおさむるやけさの春

同家郷

千代万代こそおさまれうたひ初

大坂惟住氏重栄

るの年の菓子やけさなめくぢり

同勝康

来る春は友だちなれや門の松

同友正

いつはりのなき世なりけり粧竹

同定治

〔春上 五〕オ

門松の右ひだりもや歌合せ

和州箸尾氏正之

祝ごとは門口からやかざり縄

花井氏賢重

松竹や縁をむすぶの神の春

同舟戸氏光義

富て礼を好は可なり御代の春

江戸松本氏直頼

田舎に住なれし者、都に越年して

多武峰福本氏宗貫

来る春や跡巳かへりの午の年

和州山本氏好道

去年よりもあ、洛陽や千代の春

同古桶

元日や子日ぶんのび長びさし

同上田氏昌光

めでたしとおもほゆるかな戌の年

同乃心

波の鼓うつや住吉松ばやし

舟戸光義

うき立は春のけしきや茶の霞

同乃心

かざりけり松は二木を都人

上柳重嶺

のんどりと大ぐろやかや午の年

錦川北氏直勝

年のかしらたかみ結びや神の春

広瀬氏宗徳

翻刻『うぐひす笛』(春上)

神原氏伊安

あら玉の出るや丑のとしがしら

一元気めぐむや人を神の春

沓冠鶴亀松といふことを

ついたつる門役ならめ松とまつ

おもふこと祝へたゞいはへ神の春

民の富貴吹付るかな庭かまど

はらみ句も歳旦生のむ月哉

大やうな立ふるまひやけさの春

陽春にあり年徳のつとめやう

民のかまどにぎ大ぶくや君が春

朔日やめでた一とせこしの物

春の日や天地はじめて一霞

両瓶の花とやいはんかどの松

霞さへうすやうにかく試筆哉

即座にもくるや言葉の花の春

かざり竹は御代をあがむるたとへ哉

「(春上 六二オ)

狛氏長綱

夕煙

善但

姫路住小林氏友愛

同岩見氏貞政

同西塚氏長重

同安積氏可吟

同里氏可春

同林山氏次平

同武田氏一元子

同里田氏豊祐

「(春上 六二ウ)

宇和島下岸氏一剋子

三原住永田氏一瓠

良弘

対州桜井氏

けふの日やひとつにくり毛午の年

あたらしき咄の口やあきの方

年ひとつこよなうのどけし今日の春

王春の代にぞ日本のまつりごと

新玉や面向不背四方の春

西の年のあら玉子かや十二月

絃音や去年をとりの弓始め

いわひけり数の子共もとゝのさい

蓬萊や南方めでたき山柑子

我身ひとつ秋ではなひか花の春

親くを千世もと祝ふことし哉

若水や氷も徳のながれ川

しはずをば越つふとりつ若あびす

祝やありうたうく松ばやし

東より春や御かうの一天下

春たつみ冬さるよりや西の年

くれはどりあやかり物ぞきそ初

作州久世田中住定直

同国中村住重就

若州小浜浅山氏宗直

同国住一円

近藤白甫

大津行松正平

大和今井竹谷氏宗弘

箸尾頼智

「(春上 七)オ

柘桂氏充世

林清

若州松平三弥

彦根住智昌

志水政方

信楽住吉住氏心楽

同杉本氏設暎

江戸筒井宣安

三宅氏重宅

文字にさへ三物と祝ふゑびす哉

阿州森氏不先

川草

鏡餅むかふごまにや門びらき

末平

え方角を勝手屏風や神の春  
年徳や信力けんごのかどの松

江戸島氏久隆

年徳や春をばつげのまくら神

金寿

明六の半に立や三の春  
さほ姫と隣男か門のまつ

神原氏伊安

門の松平かに代や君が春

一吟子

元日やはじまる市のわか夷

吉重

かど松や去年のさむさを忘れ草

三順

およそ以てわたくしなしや神の春  
もと立て道なる御代や門の松

友実

家の風にけふぞそなれ木かざり松

義克

かざりわらは村合の田の穂長かな

善但

暦にも先年徳や神つかさ

友実

年立てやうすめでたし君が春

義克

ふたがりも明て見初る暦哉

道可

大ぶくは千代を挽茶のゆはひ哉

秀女

若水の水上や京のゑびす川

荒木氏時堅

天筆や和合洛中けさの春

大石氏砂石

蓬菜にまふたる鶴は祝ひ哉

千之

大ぶくに小しばのはいや梅法師

永原氏一器

長能が言葉の林や筆はじめ

三云

目に見えてくるや鳳凰西の年

「(春上 八)ウ」

蓬菜の新田なれや開き大豆

太都

若水や愚者もたのしむ宿の春

正光

くる年はゐのかずの子の初かな

吉重

諏訪の海や豊年をしる氷様

昌栄

始て都の春にあひて

辻氏不求

あけ山と云は、神代に此所より

宗臣

弓取て春は都に射ぞめ哉

一義

同

久隆

「(春上 八)オ」

たれもかもしるの一口やうたひ初

一義

同

はじめて夜明たると云伝る

おもしろふ年ぞ明山天が下

谷庵

九分めに汲むわか水や人心

好行

はじめたる所へ鏡餅をすゆるとて

うちはまるくなりてぞすゆるかゞみ餅

同

年暮しその返報にやかゞみ餅

信真

思ひつゝぬればや聲に水祝ひ

芳房

春風や松の内外に福の神

追分佳正忠

大裁の方やさかへんはなの春

只計

大ぶくや祝ふて三度二度の春

勝政

「(春上 九)オ」

毬打もや飛早玉の神の春

一友

おさまるや弓始のみいぬのとし

長好

さかやきや松も色そふ春の礼

千之

笑貌はさぞお心のわかゑびす

一友

よひと今朝や二度の大願神の春

三云

筆の軸や是も書院の粧竹

同

いせゑびす春はさざれの門かざり

同

弓を袋年の矢筒かかざり竹

資春

なかりけり花も紅葉も門粧り

伊安

竹連子しつらひけることぶきに

同

一ふしに千代やぬりごめの弓始

不求

松ならで家のかざりや竹連子

同

若水もたつとすんだる今年哉

設囃

松本重吉

蓬菜やだい／＼柑子未勘国

乗秀

若水に耳を洗ふなうしの年

一可

誰目にも立たる今朝の霞哉

長佐

千年と代ぞ祝ひ鶴の酉の年

清貞

冬と春と角にまたぐや丑の年

智浅

明て今朝年もいろはの亥の日哉

善次

歯がために祝ふ雑煮や身そく才

長好

うたひ初は国もおさまる時代哉

一義

わか水や老のわかやぐしはぐすり

三云

「(春上 十)オ」

年玉や大判小判おこし米

同

御代いはふ舌さきも永し君が春

道可

今朝祝ふ雑煮の箸やもち始

同

年の和歌の外題は古しけさの春

道可

福神もけふやこもりの松拍子

宗永

春の木は吉書の筆のはやし哉

善克

商売をいわひて

直勝

米屋とはおもふ物から蔵びらき

重次

八百万夜に日にしるす吉書哉

直勝

砂がねを持籠て入よ蔵びらき

重次

屋の内や勝手もつよき弓始

同

砂がねを持籠て入よ蔵びらき

道可

門まつの氏子といはん礼者哉

心楽

市町も立やにぎはふかどのまつ

道可

第一の宝やことし太郎月

三云

ほだはらや蓬菜の海のそこ土米

道可

目出たきやかしこきが引うしの年

直勝

目出たさは手ごたへしるき吉書哉

伊安

天下せい未の年のはじめ哉

信夫郡定秀

年徳の神の社領やまつ拍子

道可

一ふしに千代をこむす子や諷初

古桶

つきすゆる家の柱やかゞみ餅

道可

けさ福の住家や戌亥のとし始

重栄

雨露の恵年や葉子花の兄

道可

大ともやなにはにつけて三の春

一子

年のよるさたに及ばじ若ゑびす

道可

門松のみどり子なれや太郎月

芳房

蓬菜の山また山や二度の春

道可

いつもくめでたさに気や若ゑびす

そめ

弓始せぬもやものゝふがいなし

道可

世をいはふ大ぶくなれや春霞

ひで

松は年竹や世の中君が春

道可

数の子を祝ふや芋の親ざかな

醍醐住貞達

長いきは見事な物ぞ門の松

道可

翻刻『うぐいす笛』(春上)

醍醐住貞達

「(春上 十二)ウ

暮てこそ何がおしかる花の春

同

高砂やきねが鼓も松ばやし

友実

明て春やひかりやはらく大和窓

友実

今朝きくや年徳ふける金衣鳥

長次

木つ木つと二本立たり門の松

信真

梅がえやきあるくり声うたひ初

三云

神の春の印や空に青幣

道可

午巳にぞえ方はりぬる開豆

已迷

亀になりて君を祝ふや若ゑびす

勝政

蓬萊はおのころ島か神の春

一吟子

祝ひ釣かけ鯛や春のハの字なり

宗直

寛文や十二ひとへをきそ初

重宅

都草はかどの郡のかざりかな

道列

仁義礼智新春たゞし御城門

濃州大垣住 蓑虫子

屠蘇の酒二三ばいもやつい重

善但

「(春上 十二)ウ

三十六の年元日夢想に

一首よみて又五文字やけふの春

山辺氏 宗治

犬の子やあせら霞は太郎月

末平

着そむるは先一だんの小袖かな

宇和島住 山本氏 茂宜

ゆたかなる年来立るや松粧

山中氏 常春

年徳のうるはしき友や若ゑびす

和州桜井氏 任和

百性の祝ふ稲荷やあきの方

道可

「(春上 十二)オ

立松や枝をならべてかどのまへ

和州桜井住 草也

大ぶくは昔の例を挽茶かな

京四条 一利

遅うしも淀まずくるやとし始

長綱

光陰は矢の根の年のいわひ哉

随有

末代のためしに引やかざり縄

友明

依子やけさ来る年のうしの舌

座頭 慶光

書初や硯にむかふ福寿海

海老名氏 友久

引出す鳥の初音も我ごとし

桑原氏 草也

着そむるは水のとの茶の小袖哉

城秀

心ひろく体ゆたかなりけさの春

長谷川氏 治次

三吉野、山くうれし花の春

門松は運と安堵の二つかな

藤次

おさがりや軒のゆづりはしだらでん

門波氏定利

子日にや綱も引初比良小松

江州八幡住伴氏資春

いせゑびやかざる町屋のお年寄

〔春上 十三オ〕

松やには千代にや／＼の子日かな

井筒氏友静

鳥追やおめざおくせずうたひ初

常春

穴鳥や雲ゐをかける初子日

随流

錢箱の注連は年号からげ哉

政善

門松をけふ引つぎの子日哉

友実

正月やもろこしまでも至りがほ

不求

内野にて子日の松やひくらふ人

未及

書初や寛な文を三つの春

金寿

永遊びするや子日も下り松

金寿

去年よりや何のかのとの祝ひごと

〔春上 十三オ〕

五条万句に初て指合をきゝて

随流

とづる帳や利生三郎ゑびす紙

定可

松原や初の手引のみやこ草

随流

大こくや戸帳にこむる袋とぢ

同

幸と見えひき草や雪の松

義克

楽参り閑におがむや神の春

同

引よせてね、こねの日の小松哉

道可

正法やかざるえ方の神の春

一身

君にひかれその情こそ都草

信真

江州八幡万句巻頭に

追分光明寺寿覚

〔春上 十四オ〕

筆の海や試む湖水まん／＼句

随流

子の日には目くそといはん松のやに

古楠

追分光明寺寿覚

同

我も松も老てわかやぐ子日哉

不稚

追分光明寺寿覚

同

けふ子日扱人間の遊び事

友実

追分光明寺寿覚

同

引て祝ふけふの小松やねから草

義克

追分光明寺寿覚

同

ひきあげてつかひざかりやかふるまつ

金寿

子日

翻刻『うぐいす笛』(春上)

男松女まつけふ引いれの大辰哉

三順

朝な〜うる声きくや鶯菜

辻氏信真

初寅

初陽毎調菜なれや鶯菜

池田三云

七種やまたる、物は鶯菜

重郷

初とらに百足日記の帳もがな

榮源院三順

初声の風味もよしや鶯菜

竹井吉久

初とらの子も子宝やふごおろし

山辺氏宗治

ひぞればやすかずは老の鶯菜

井上宗重

初とらは年の矢をさすうつぼ哉

夕煙

た、きはやしゆで物みせん鶯菜

信真

鶯菜赤ばやいか、金衣鳥

道可

卯杖

のぼる日も辰の初を卯杖哉

池田氏安直

小うたふしてた、くや薺なしよくな

讃州家郷

〔一春上 十四〕ウ

奉る卯杖や親にそへちから

友実

唐土にも摘かやけふはから薺

桑折宗臣

年玉の扇やしやくにつくう杖

三順

た、く菜は七つ拍子ななづな哉

花井賢重

しろかねのまろかせにぎるう杖哉

随流

く、たちをはく侍や土大根

古桶

七種はかつをにかはるた、き哉

三云

七種

雪つんで人につませぬ若な哉

杉本招喫

人まねに祝ふ若菜や大拍子

藤次

かみ味もなごむ酢芹の尊哉

随流

耳な草も籠に摘ぬる若な哉

三順

年明けて見るさうかうの若菜哉

吉直

〔一春上 十五〕オ

八幡にて土田の根芹と云事を

根芹つむわが衣手や土だらけ

ゑびす川や水も若なの福わかし

鈴菜をばけふはひこなの尊かな

なお以ていはへ幸甚福わかし

摘とるはもつとも鷹の鈴な哉

野長瀬に祝ふ若菜やかぶら坂

おむべひやしらまな、くさ福わかし

しゐて見よいやく三ばい福わかし

七な折句

七くさはなつみ水汲み菜みそかな

雪分て菜をぬき足や爰かしこ

雪のひまありげに下女や摘若な

絶ず生るふる川の辺の水菜哉

七くさは我人の日の祝儀かな

摘分て見るや五濁の水入菜

寺村清貞

勝政

友実

道可

三云

金寿

義武

一義

善但

不求

昌栄

善但

宗永

宗徳

〔(春上 十五)ウ〕

奉れ名にし近江菜君が畑

出てよべ今いくか有てうるわかな

雨露のうてなも摘や仏の座

いはふ時や口でもた、く福わかし

あは雪やたまらばせんだん仏の座

七種ははやし舞なら七がへし

な、草や七福神の拍し舞

はやし立る市や七座の福わかし

ながらへばいつまで草や福わかし

年も若な末たのもしや福わかし

味ひも煮て各別のほかなかな

金寿

武田一元子

常久

松井氏泉隣

川草

友明

善但

常久

吉重

道可

〔(春上 十六)ウ〕

未及

義克

道可

随流

藤次

〔(春上 十六)オ〕

金餅や庭たのもしき福わかし

翻刻『うぐいす笛』(春上)

人はつみに至りつくせり野べの春

大坂住齋田氏一得

まな板や是柳上にうぐひすな

同天満住齋田氏義文

な、十四いはふ若菜や丸額

休意

若やげる七葉は寿命薬哉

虚哉

春雨はなづな拍子の手ぶり哉

寿覚

左貴長

「(春上 十七)オ」

左貴長やえびらをみればかくれ蓑

藤田氏川草

書初をけさあげまきやとんだうや

桜井白交

左貴長は子共をよすお鳥哉

道可

爆竹のはねつくろひかふくさわら

義克

三毬打の竹も節黒わらび哉

随流

さぎてうや是もはやしの松と竹

宗斎

さぎてうは夜明鳥の時分かな

一子

爆竹のもゆるけしきや富士のなり

随流

さぎてうと云や二束の粧わら

時堅

しろき扇こや竹藪にさぎつてう

吉重

餅粥

新宅やふときがうへの粥柱

大都

つよかれよ頼だ人と粥ばしら

「(春上 十七)ウ」

かなな餅や杓子定木に粥柱

道列

餅船やあかまに立る粥ばしら

友実

あかつきや祝ふねぢもちかゆの餅

金寿

今朝の粥や赤豆八斗めもちおもり

義克

今朝の粥や赤豆八斗めもちおもり

義武

梅

鐘梅は見えけり九尺まのあたり

永田氏昌栄

春日の社奉納に

くれなるの梅や春日の蘭奢待

藤田氏吉重

梅の絵掛奉りて

文を好む夢想やひらく窓の梅

岡村休意

たれか是をはめさし梅の花盛  
物の味たゞこの花に籠りけり

天神法楽に

紅梅もひらかぬ先や柘榴粒

鐘梅をながむる人やかな首

花の香や梅が小路の染物屋

梅の香さつ、まんとらんはなの袖

紅梅やよき衣着たる歌袋

けふひらく梅や見一無頭作

御綸旨を頂戴して

天氣をばうけてひらくや綸旨梅

花の次第しるさば梅や一の筆

鐘梅の花は刃のにはひかな

天神講に

梅の花ひらく北野や星の宮

西武一日千句追加に

〔(春上 十八)オ〕

道可

山口宗友

八幡清貞

宗治

善但

信真

川草

安直

瑞泉寺 智浅

桑折頼邑

〔(春上 十八)ウ〕

秋月

随流

神垣や一座にひらく春千種

梅よしはそひよりのある木ぶり哉

文を好む花や色くちらしがき

ね入ばなや東枕にまどの梅

開くとは万によしやむめ曆

香よすでに芬々たるき軒の梅

ゑき有は香をかく山の梅花哉

香にめで、見にも北野、梅花哉

大やうに香をもち梅や花の兄

とび梅の花はやつとこ盛かな

吹くればこちたく匂ふ梅花かな

穂を継し台は香炉か梅の花

松梅は諸木の中の笠木哉

紅梅や老まつあれば花のおば

誓願寺春日絵馬奉納に

紅梅は諸願成就をうへ木かな

初咲はなんぼう見事梅が枝

同

岡本政長

辻氏政勝

正之

対州原氏夕可

若州小浜住延重

舟戸光義

同名正道

〔(春上 十九)オ〕

太都

津田氏知政

小浜一円

重栄

辻村芳房

宇多重綱

藤次

木村風吟子頼之

咲初る梅は難波を手本かな

道至

廻文

風の手うらあへば梅花の益もなし

貞則

ながめむは庭にこ庭に葉梅哉

春童子可申

北窓の梅や気ほうじ雪のやど

同

一輪と望むや一炷香やり梅

永原氏一器

花の色や紅梅月毛生駒やま

「(春上 十九)ウ  
久治旨一砂

めぐみぬる花や懐妊こもち梅

藤次

かすむめもとそれかとも梅花の貌

一吟子

神によし人にもよしや梅曆

道可

つぼみこそ天目やりよ梅の花

宗臣

みのべの天神にて

善但

宿の梅や客かきませる十炷香

対州

すくなるは美濃部の梅の立枝哉

一義

鶯の歌樂所歎まどの梅

直頼

ねつおきつ美濃部の梅の花見哉

可閑

梅がえにつく短尺や鑊じるし

宗臣

鑊梅やきりとめがたきすはひ物

義克

鑊梅やらそふ色やあかめつら

馬淵長順

鶯舌の声は勅許か繪旨梅

義克

紅梅の色香をつゝみ枕かな

信夫仁科住盛行  
彦根住智昌

すぎさへとのぼるや梅の花の波

友実

いたいけなあこが梳ざさや梅の花

三順

ちるころはす口か梅の花の貌

道可

はた枝にさきてふ梅やすかはらけ

宗重

たんざくの書初いそぐ梅花哉

桑折頼邑

神心すぐなる梅のたちえ哉

步入

儒者のもとにて

随流

酔をこふは花やせたりし小梅哉

一義

余の木毎まけな数さけ花の兄

武佐住昌迪

「(春上 廿)オ

一義

梅ひとり香は扁ならぬ夕部哉

随流

「(春上 廿)ウ

鑑つけてきく鐘梅のほひ哉

越前府中住卜安

毎朝やきなことちぎる鳥の声

長好

花よめの色紅梅はすがほかな

福井正明

うぐひすや尾も白雪の琴の爪

勝政

さのふけふ咲やおとゝい花の兄

黒石吉直

うぐひすの経や十方仏土中

一身

人の庭の梅ざかりを見て、

又の日雨ふりければ

たのしみや籠の内にある金衣鳥

〔春上 廿二ウ〕  
岡崎谷庵

さのふ見てけふぞ嬉しさ一梅花

恒川正光

鶯の花ころもきや和歌の道

舟戸一無

梅が香は木の目の眉の匂ひかな

秀女

咲花に鶯の音や啼わらひ

そめ

花の色も紅梅殿や和歌の家

〔春上 廿二オ〕

月星とまつ間こそ金衣鳥

安井本勝

花の咲閨月あれ梅ごよみ

重尚

鶯も引音ぞこれはいかな琴

对州原氏夕可

すましりや煎豆に似てつぼむ梅

道可

巢を捨る経よみ鳥は出家かな

馬淵長順

岩崎氏宗次

同

木の母やとふうぐひすの経の声

貞義

鶯

信真

鶯の歌こそ梅をかざすより

三云

山本氏一吟子

伴氏資信

鶯よしよさをくるりと法花じゆず

友実

なまりしは関東学歌読経鳥

西川氏重長

鶯を飼ふや隣のつぼのうち

久隆

鶯やぬけつくゞつゝはなのなみ

是政

ふくみ声をはる鶯や節がはり

一義

鶯の経にやなみだこぼれむめ

〔春上 廿二オ〕

梅ときくや鶯たまる口のうち

黒石吉直

鶯の声や花前に聴聞す

宇和島古田氏 一玄

歌の徳敷鶯も位高ま山

同 島氏直好

新王は竹の林のあるじかな

多武嶺 峯

名にしおはゞいざ琴きかむ金衣鳥

道可

鳥千句巻頭に

鶯の花にや越殿閑坊主

竹井常久

詠シタウツやまだうぐひすのくちの中

随流

「(春上 廿三)オ

両がへや吟がはりなる金衣鳥

一義

梅の木だち目貫と見るや金衣鳥

忠良

うぐひすや跡口引て舌つゞみ

水口若林 重貞

とまり客呼鶯や花のやど

善但

鶯や歌道神道経のこゑ

金寿

鶯の初音や花を恋の歌

桑折頼邑

鶯の声は日の目かゆきのやま

未及

遠音さす鶯笛ややまと竹

義道

絵に書たるを見て

霞

鶯の声なかりしはおしゑかな

道可

たべ酔や雲あしながす春霞

梅が香に物かはなれや匂ひ鳥

同

花さかぬ嶺の霞や恥かくし

江州八幡住寺村氏清貞

うぐひすの歌口や餌を拾ひ題

義克

去年ことし霞のきぬや一つゞき

宇和島加幡氏正弥

三香が春立日よりにはひ鳥

座頭 城秀

日輪は霞のきぬの火のし哉

太都

梅がえはうぐひ数寄屋の座敷哉

宗永

信真

天の戸のあかり障子か朝霞  
ひつばるは霞②の絹やうはたるみ

〔春上 廿三〕ウ

善但 義克  
佐保姫の眉をつくろふ霞哉  
いつ晴着霞は山のうは小袖  
おく山や七重の屏風八重がすみ  
山遠ふ海あさでする霞かな

重綱 良弘 梅女 芳房

短尺やかすみうながす紙の中  
立まよふ霞や花を恋ごろも

乗秀 正次 道可

谷の戸に霞や山の腰障子  
羽衣が松にかゝりし春がすみ  
ならづけか霞の包む三笠山

重吉 谷庵

浦に引はげに網の手の霞かな  
山と山まぎらかすみの高根哉

井上宗重 一義

羽二重を霞にそむるもがり哉  
四方山の頭かうけぶりか春霞

秀綱 一円

かすまざる御代にもかすむ霞哉  
八丈にかゝる霞は島絵かな

友実 安直

吉野山包む霞や葛ぶくろ  
とこの山霞やこれも絹表具

信楽住山本氏 一楽

豆腐色に四方の岡部の霞かな  
釘めなしに板敷山や春霞

友実 吉直

〔春上 廿四〕ウ

野を遠み気も晴天や一霞  
くらま山霞の絹やふとんぱり

友実 秀綱

富士の山も根引にするや八重霞  
さほとなるにかゝる霞やかり衣

小野氏好貞 同内野氏

目には見て身にきぬ物や春霞  
住吉塩干にまかりて

友実 谷庵

海のおもて立や霞のから衣  
見へがくれ山をもたぶら霞哉

大津正平 古桶

引て行霞や沖のしほざかい  
翻刻『うぐひす笛』(春上)

谷庵 直利

富士山は霞のきぬのふせ籠哉

直利

霞ばつとたてるやいづこのつぺらく

善但

初鮒の子をみづうみや鱈鉢

江州八幡住長次

雨の後や霞のきぬのあらひたて

道列

初網やかゝる折にも近江鮒

信真

具足餅

子の数も八千八川あふみ鮒

随流

武士のはがねならずや具足餅

永原氏秋月

御忌

具足餅久しかるべきためし哉

道可

御忌やたゞ法然ねんの御相統

池田三云

軍神の銚やかちぎね具足餅

友実

串柿のそふやさねよき具足餅

随流

初午

ねばらつよふ是や糸毛の具足餅

善但

さねのおれも侍ぞかし具足餅

道列

初午の豆や皆令御満足

竹井氏吉久

ひたゝれや是もかちんの具足餅

友明

初午にまへひざ折やこなたから

夕煙

くゝたちをそへて祝ふや具足餅

次乎

初むまをかひに買たる御札哉

宗永

胴のつよき事を祝ふや具足餅

義克

廻文

なかりひままんづ初午参り哉

太都

初鮒

初午を飼ふは印の杉葉かな

義克

「(春上 廿五)オ」

「(春上 廿五)ウ」

「(春上 廿六)オ」

初午や巳をばかしらに作り神

長次

あらたまりあらたまらぬや春の雪

恒重

あは雪は初午のはむ轡かな

一佐

山の肩や残る雪輪の紋所

清之

うかれける人は初午参かな

道可

つもる雪残るやさんのちりほこり

正之

初午や銭もち首のお散銭

川草

日の目にもあはざる雪やみずしらず

道可

初午や髪ふりいさむ鈴の音

長綱

春の日はふいごかとくる丁銀花

三云

初むまや千疋つなくお散銭

正信

東よりあたゝになるぞよかんべい

古桶

初午にけふぞ追つくありき神

随流

去年の雪げにやふりにし物語

同

初午のつめかけつゝもまいりかな

音直

こまがねの花がちよほく残る雪

五所住良弘

残雪

雪汁や雲にながるゝ大井川

江州八幡寺村氏春家

三云

春の日やとけてあられのたまり水

友実

さそふ水ありなばいかにゆき女

三云

春氷

正明

雪汁は名こそながれの雪女

昌栄

所へとくる氷ややれごろも

貞成

残る松嶺に淋しや雪の果

夕煙

ながるゝはむ月にみてぬ氷哉

一友

御せつ法はやとけ給へ雪仏

常久

厚氷とけぬや風の手引かん

三云

風も福もて来る春の銀花哉

ひで

うらゝかに笛吹風やひやりつらゝ

朝申

翻刻『うぐひす笛』(春上)

「(春上 廿六)ウ」

「(春上 廿七)オ」

薪能

風の手よさすりてぬぐへ春の月  
待宵のから木戸なれや朧月

江州八幡住花夕  
宇和島桜田氏親昌

〔春上 廿八〕オ

薪能見にいざといはれて

余座にかゝり能を見申たきゞ哉

貞利

たゝき鐘のしゆもくの跡か朧月  
花のもとで見ると見るや美景のよるの月

辻村氏芳重  
竹谷氏谷庵

〔春上 廿七〕ウ

保性やたきゞの能も四天王

随流

よろづよねの春の加増や閏月  
朧月は非をわかぬや遠めがね

宗弘  
一義

春日

ねぶる山は朧月よのまぶたかな  
山に出るめなうの珠かおぼろ月  
朧月やひかる源氏のうす仮粧

村上長次  
安直  
義武

足遅きをおもへば春の日まん哉

江戸住筒井氏宣安

春の日やほつこりあたゝかまんぢうなり

歩入

涅槃

久かたの光まします春日かな

杉本氏招喫

ゐてとけて道は和ぐ日定哉

水口住石王氏不卜

鶯の山や四鳥の別けふの暮

栄源院三順

ひかりさす春や柄永き日からかさ

是政

時をかんじ花も泪をねはん像  
かなしみや今は虫はむ涅槃像

友実

随流

春月

田鶴もながむけふ計とぞ涅槃像

正世

〔春上 廿八〕ウ

うき世にはかゝれとてこそ涅槃像

ねはん像やげに有がたき御葬送

かなしさうになきもさどりの涅槃哉

ねはんには天も雨露くゝ泪哉

鳥は物可愛らしくやなくねはん

雪仏きえてふかとして涅槃哉

かへらぬやくひの八千度入涅槃

ひぢをまげ枕たのしむ涅槃哉

せん薬も御茶湯となる涅槃哉

末の世もながく侘へき涅槃哉

枕がち弘誓の船に涅槃哉

辞世にや南無阿弥陀仏涅槃像

牟尼月の入さや二四が八千度

ねはんとて手向一首のわかれ哉

せんだんもなげきの春の最中哉

雪の果は寒さたすかる涅槃哉

入逢や鐘をまくらの涅槃像

大都

勝政

三云

善但

道可

休意

一身

治昌

信真

道可

川草

夢覚ぬ人をいだきて涅槃哉

世にかくれ世にかくれなき涅槃哉

跡に鳴は狼ときつ涅槃哉

涅槃会や本来白き雪のはて

悪を演善こそいそげ涅槃像

石塔

石塔をくむ杖つきは座頭かな

天菜花

旅坊主は、きに土や天菜花

筆の味かみ覚へたやつくぐし

冬毛かや雪間に白し土の筆

はかま着は春の物とやつくぐし

雪間より出るや唐の土の筆

調業やまづこゝろむる土の筆

助幸

是政

貞則

勝康

善直

〔(春上 廿九)ウ〕

道可

村上氏長次

政重

安直

親昌

長次

盛治

〔(春上 廿九)オ〕

翻刻『うぐいす笛』(春上)

杉立や次第に知恵のつくぐし  
緑青をつかふ絵筆歟つくぐし

忠春  
宗臣

春雨は雪の白地や芥子鹿子  
種かしゃうつす程ふる春の雨  
たれこめて春の鬱気や雨簾

瑞泉寺 智浅  
義克  
友実

椿

花の輪や天目ほどな伊勢椿

和州宇多住岡崎氏秀綱

春雨は点滴なれや琴の曲

善但

里椿己が色をやあぶらあげ

〔(春上 三十一)オ〕  
桐山歩入

はじめて逢たる人、文のおくに  
一首かきておこしける返事に、

八幡喜多川氏 随意

花筒や竹鉄砲の玉つばき

道可

折節雨ふりければ

千重万重花に包や玉椿

善但

言の葉のおめにかゝるや春の雨

道可

きても見よ編笠なりのいせ椿

辻村勝広

旅の宿りにて夜をあかしかねて

中のしべ箒なるかやちりつばき

芳房

たゝり鐘つくぐ春の雨よかな

随流

ちり椿後やつもりて山椿

三云

雲水やみて解てふる春早雨

花夕

咲花や椿童子のわらひ貌

三順

月影やびつくり肝の玉椿

光明寺 寿覚

百千鳥

春雨

歌の友はひよく連衆や百千鳥

錦直勝

西武翁両吟第二



「(春上 卅二オ)

春風にいとなまめける柳かな

大坂好春

折人の手にさげ髪の柳かな

ひで

恋ぐさやとひつくとどひつ柳髪

友実

誰が目にも見るふさやうの柳髪

神原伊安

綱による物ならなひか柳髪

道列

弥生三日、人の方へ柳を手折てつかはすとて

まいらするはびんきりほど<sup>(下)</sup>や柳髪

そめ

ゆく水にかずかく物や柳筆

友実

伍子胥ならで門に目をはる柳哉

高瀬正世

一季にも二度目はる柳かな

永原秋月

うるしならで柳もみどりせしめ哉

道可

ひつしごく水引なれや川柳

京長次

「(春上 卅二ウ)

りうくと風に声する柳哉

紀州若山白櫻氏家久

とこしなへにむすぶちぎりやいと柳

長綱

青柳やいはゞ霞のきぬのいと

そめ

江州長命寺にて

命ながき柳は跡敷松が崎

随流

柳腰によれつもつれよ藤ばかま

一吟子

八幡鷹飼の柳と云事を

鷹飼の柳やいはゞみどり丸

寺村春家

背中にもながるゝ髪や川柳

うつす樽の酒のたれ口も柳哉

三云

川口の柳や風のちからがみ

道可

山鳥のしだり小柳やながめ物

追分住正忠

青柳はね覚の色や朝がすみ

末平

鶯の声ほそながしいと柳

伊藤利定

ときしわかぬ物にぞ有ける柳髪

辻村芳房

さし渡す枝やそり橋川やなぎ

之政

品やか也心はえだに米柳

大坂重栄

しばしとてや立坂むかひ柳樽

長井吟風子

柳髪むしるは風の子ども哉

ひで

川柳ながれたつるや女郎蜘蛛

本勝

じゆずにつなげ露のたまれるいと柳

露身

「(春上 卅三オ)

まな板や鯛つりあぐるいと柳

夕煙

観音の葡萄の御手敷こぶ柳

義道

枝たれて往生腰やうば柳

江原氏吉勝  
柘桂氏充世

川づらや見ちがへはせじ瘤柳

一義

風にもまるふくら雀や河柳

〔春上 卅三ウ〕

水はすまし枝やたれ味噌こぶ柳

友実

風の手や引三味線のいと柳

則武

松苔といふがごときや瘤柳

道列

乱れ垣や櫛もとほらぬ柳髪

三云

みどり子や持てよろこぶ柳太刀

長綱

池水にあれ見よ蛇柳あらわれたり

友実

出来物によりてしほらし瘤柳

太都

門の柳春はみどりの戸ばりかな

出口氏貞木

もつる、やしぶこぶ柳ちゞみがみ

川草

行水の玉のをゆらり河やなぎ

丹波塩田谷村箕浦高伴

川岸にそふや石がねこぶ柳

義克

お菓子かや枝もむすべばこぶ柳

随有

独食や陽枝(ママ)にするき瘤柳

三順

葉の露や淵は瀬となるこぶ柳

休意

河ぞひのこぶ柳もや水ぶくれ

金寿

かゝむ腰は川のせむしか瘤柳

義武

曲鞠やひたひにつくも瘤柳

〔春上 卅四ウ〕

観音の白毫なれやこぶやなぎ

氏遥

柳魚

吉重

かうやくやつくあまはたのこぶ柳

正光

春雨に目ばるといはん柳魚

山下氏義克

みだれ髪のはす手もかくや瘤柳

藤次

鱈にやほそきいとほぬ柳はへ

久隆

瘤柳くずせ松やにすいかづら

宗宣

春雨にのぼるは柳もろこかな

長好

門出に先口いはへこぶやなぎ

〔春上 卅四オ〕

直明

まな板や風はけづらぬ柳うを

金寿

秋はかね春は木は木かかへる雁

意春

帰雁

うす霞雲に消ゆく雁書哉

洛東隠士滝川随有

うす墨の繪旨歟霞むかりの文字

桑折宗臣

雲水に天津旅雁やかへる浪

義克

ながむれば南を遙にかへる雁

古楠

笑ふ花にはづかしかりやかへる空

そめ

しめられてもとの国にや帰る雁

貞成

しるよししてかりにゐにけり天津空

道可

八陣をなすか箕の手に帰る雁

桑折宗臣

蛙軍見捨るかりや己が陣

勝政

越路へと戻たれ帯か帰る雁

友実

月を負北むく雁は背もし哉

一友

咲花の輪番ならめかり燕

伴只計

「(春上 卅五)オ

三月三日 付 曲木宴 桃 鶏合 蓬餅

雨に跡や旅雁もかへり三笠山

一義

ひろごるやもゝの世界の三日の月

岡村氏休意

ゐにつくや春の湊へかりの舟

姫路友愛

順逆の宴はいやまし桃の酒

宗臣

腰つけや行もかへるもかりの友

金寿

桃の酒や柳の樽に桜飯

随流

土産とや帯一筋にかへるかり

可申

三日月や草より出て草の餅

金寿

よしあしのかりねばかりや帰る雁

同

友にあふやいつまで草の蓬餅

吉重

花を見捨是までなれや帰雁

善但

青みよしなら録(まき)青か草の餅

昌栄

さらば〜只今罷かへるかな

秀綱

蓬もちやそのはらしげる木賊色

常久

「(春上 卅五)ウ

桃の酒君々たるは柳かな

道可

三千とせもかはらけでくめ桃の酒

加幡氏正弘

曲水やけふ咲花の百瀬川

義克

桃の花や過し小町が若ざかり

重郷

葉ぞと君はしらずや草の餅

正光

鶏もよはせん物かも、のさけ

道可

春風のすゝむ栄花や桃の酒

義武

是ひとつ家づとにせん草の餅

一吟子

内裏びなの御調物にや草の餅

太都

花に風ぬくるかしらの毛桃かな

春隣

桃の酒や酔てたよ／＼いと柳

一器

桃の弓柳にそふやいとつゞみ

安直

桃の酒はよもぎが洞の泉かな

善但

陽気にあまかせて吞は桃の酒

吉久

酌や桃の花物いわぬ色上戸

千之

柳樽かざる三枝や桃の花

義克

さし上る柳に鞠や草の餅

義道

桃の弓は蓬もちあるうぶ屋哉

杉本 枯喫

物いはぬ雛や桃のはな男

随流

桃の木の花見に行や一またげ

太都

はかりなし升の数さへ桃の酒

資春

曲水の詩賦や心のはな筏

芳房

咲分の桃や源平はたぞろへ

長綱

肌へよしの雪でやあらで白き桃

吟風子

三寸ときく名も理りや桃の酒

一義

こがせるや是ももえ出る草の餅

ひで

〔(春上 卅六)ウ〕

姫桃に鶏髻の節句かな

友実

柳まく頭の辻も巴の字かな

道列

九十九こん年も若やげ桃の酒

正光

鶏合時にとつての見物かな

一子

祝ふ度ももゝかさなりや三千代草

可申

廻文

安重

も、木名や目出度たてめ桃柳(マ)

三日月や盃なりにめぐり水

も、のこひやふり分髪(マ)の柳(マ)ごし

も、とせもいはふ柳やつくもがみ

いざ子共おつぼの内のも、の酒

百会までめぐる葉やも、の酒

蓬餅(マ)のひしや雛のはかま(マ)ごし

菱なりやかきねにむすぶ草の餅

花も実もたつぷりとつげ桃の酒

合す鳥や鳴の羽がき桃の宴

三日の礼や玄関のまへの鶏合

草の餅(マ)に青侍(マ)やたかやうじ

白桃の露は仙家の白酒哉

桃花馬(マ)が詩も今日の祝儀哉

三日の祝儀柳(マ)よ桃(マ)よ雛(マ)合せ

桃の酒に酔てや花も狂ひ咲

一義

宗治

休意

友実

直勝

金寿

義克

信真

常久

善但

吉重

金寿

一吟子

岩崎氏宗次

一義

道可

麻ならできねにつる、や蓬餅

草の餅やかて、くはへて桃の宴

桃李にも口きかするや酒の酔

桃の酒に合せ諷やとつさかな

桃は上戸蓬の餅や下戸の色

桃の箸や数もよもぎの赤団子

桃花雨に咲ものこらぬ節句哉

蓬もちや三日そりする月がしら

くめやくめ不老ふしみの桃の酒

百草にまぜる葉や蓬もち

潮干

住吉の岸や潮干に嶺のまつ

水さかいへだて、塩はあほし哉

塩もはや西の宮までひる子哉

はまぐりのかいまんくの塩干哉

道可

義道

清貞

清之

道可

随流

休意

随流

藤次

善利

伴一得

「(春上 卅八)ウ」

重郷

道可

時堅

「(春上 卅八)オ」

蛤のみもほしべりのうしほ哉

義武

注

蛤をやくや塩干の沖の石

尚栄

(1) この丁、刷られている作者名を、さらに墨でなぞる。

すみよしや塩干しほみち貝の玉

随流

(2) 墨で「に」と傍注。

(3) 「春の木々も」は、底本、墨で「の」を見せ消ちして「は」と直す。

御灯

宗臣

(4) 底本濁点ママ。なお、さらに墨で濁点を補う。

明星は嶺にかくる、御灯哉

雲雀

空に遊ぶ野馬かあらぬか鳴ひばり

随流

己が巢に小ぼねを折は雲雀哉

義克

春駒

〔(春上 卅九)オ〕

八幡牧の駒と云事を

蛙鳴入江やまきの駒だらひ

伴只計

はねたりなかけろふもゆる春の駒

随流

〔(春上 卅九)ウ〕

翻刻『うぐひす笛』(春上)

# 『うぐひす笛』作者一覧

## 〔凡例〕

- 一、本索引では、『うぐひす笛』本文より、作者・肩書・句数を抽出し、配列は作者名の五十音順を基準に配列した。
- 一、作者名はすべて音読みによって配列した。ただし、名字、女性作者名に限り、これを訓読みによって配列した。
- (例) 「西武」：「せいぶ」、「千里」：「せんり」、「梅女」：「うめ」
- 一、作者の肩書は、本文内で「同」と省略されたものは省略を補って記した。その際、肩書の最も詳細なものに統一した。
- 一、作者の肩書に異なる場合は、同一作者と認められる場合には「・」で併記し、同一作者とは判別しがたい場合にはそれぞれ別に抽出した。

## 〔あ〕

安重	1	松江氏	維舟	1	畑山氏	一義	17
大坂 安順	1	大坂	意春	2	山本氏	一吟子	9
池田氏 安直	8	若州住・小浜	一円	3	宇和島古田氏	一玄	1
		江州伴氏	一可	2	姫路住武田氏	一元子	2
		信楽住山本氏	一楽	1	三原住永田氏	一瓠	1
神原氏 伊安	6	永原氏	一器	3	宇和島下岸氏	一剋子	1

## 〔い〕





〔す〕

八幡喜多川氏	辻氏	宇和島桜田氏	信楽住吉住氏	助幸	昌勉	武佐住	鶴川氏	山中氏	乘秀	座頭	辻村	和州上田氏	讚州	竹井氏	杉本氏	杉山氏	永田氏
随意	信真	親昌	心楽	昌政	勝政	常春	勝政	城秀	勝広	昌光	勝康	常久	招喫	尚栄	昌栄		
1	13	2	2	1	1	7	2	3	2	1	2	2	7	2	2	6	

〔せ〕

追分住	斎藤氏	高瀬	辻氏	政重	盛治	正次	清之	正之	正之	池田氏	和州箸尾氏	信夫仁科住	恒川氏	小山	中島氏	洛東隠士滝川	
正忠	政善	正世	政勝	政重	盛治	正次	清之	正之	正之	池田氏	和州箸尾氏	信夫仁科住	盛行	正光	成継	随流	随有
2	4	2	1	1	1	1	3	2	1	1	1	1	6	1	29	4	
大原氏	江州苗村氏	江州苗村氏	京大原氏	江州	江州住筒井氏	信楽住杉本氏	大坂今川	対州原氏	夕可	福井	志水	大津行松	山本氏	宇和島住加幡氏	和州舟戸氏	江州八幡住寺村氏	園本
千春	善次	善次	千之	川口	宣安	設囃	是政	夕可	夕煙	正明	政方	正平	西武	正弥	正道	清貞	政長
1	1	1	5	1	3	2	5	2	6	2	1	2	1	3	2	6	1

[そ]

藤田氏	川草	8
大西氏	善但	19
大西氏	善直	2
松井氏	善利	1
	泉隣	1
大津松本住	宗永	5
多武峰福本氏	宗貫	2
大和今井竹谷氏	宗弘	2
今西氏	宗齋	2
山辺氏	宗治	4
大坂・岩崎氏	宗次	3
江州井上氏	宗重	4
宇和島住桑折氏	宗臣	11
今西氏	宗宣	1
若州小浜浅山氏	宗直	2
広瀬氏	宗徳	2
桑原氏	草也	1

[た]

和州桜井住	草也	1
山口氏	宗友	2
則武		1
速水氏女	染	7
(染女1・染1・そめ5)		
乃心		1
多武峰	太都	10

[ち]

千春(ちはる)↓せ		
白川住	恥山	1
彦根住	智昌	2
津田氏	知政	1
瑞泉寺	智浅	4
忠春		1
忠良		2
江州八幡住丹羽氏	長好	5
狛氏	長綱	7

[こ]

江州諏訪氏	長佐	2
京	長次	1
江州八幡住	長次	2
村上氏	長次	3
姫路住西塚氏	長次	4
江州馬淵四願寺	長順	5
宇和島氏	直好	1
和田氏	直重	1
錦川北氏	直勝	6
坂氏	直明	2
江戸松本氏	直頼	2
	直利	1
	対州	1
	対州住	1

〔て〕

定可 3

貞義 1

讚州・市村氏 定治 3

信夫郡 定秀 1

姫路住岩見氏 貞政 1

貞成 2

丹羽氏 貞則 4

醍醐住 貞達 1

作州久世田中住 定直 1

出口氏 貞木 1

門波氏 定利 1

佐々木 貞利 1

天然 1

道可 41

水野氏 藤次 8

道至 1

〔に〕

小野寺氏 道列 10

対州 西川氏 1

和州桜井氏 任和 1

〔は〕

桜井 白交 1

近藤 白甫 1

末平 4

〔ひ〕

速水氏女 秀 9

(秀女2・秀1・ひで6)

三原住辻氏 不求 5

阿州森氏 不先 1

稲垣氏 不知 1

不稚 1

水口住石王氏 不卜 1

〔ほ〕

辻村氏 芳重 1

泉州豊中辻村氏 芳房 8

姫路住里田氏 豊祐 1

越前府中住 卜安 1

江州桐山氏 歩入 4

安井 本勝 2

〔み〕

事足軒 未及 4

〔も〕

宇和島住山本氏 茂宜 1

〔ゆ〕

姫路住小林氏 友愛 2

海老名氏 友久 1

津崎氏 友実 25

井狩氏 友静 1

大坂 友正 1

鶴川氏 友明 4

総合計

264名

830句

多武嶺  
峽

1

露身

1

〔ろ・他〕

林清

1

讚州  
林昌

1

和州五所住  
良弘

4

伊藤  
利定

1

〔り〕

宇和島桑折氏  
頼邑

4

著尾  
頼智

1

木村風吟子  
頼之

1

〔る〕